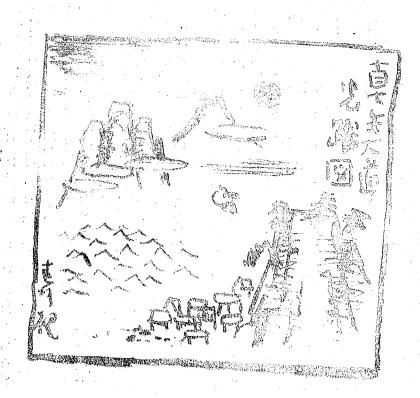
SHINSEI



號月八 卷一十第





から 叉し て貰 自分の 內

足元」 確かに足元に隙 で が見え 心にお

ゐる法、

法の中

בע

へわ ・自他共にないかるなどし、 質

は、本當の力が無さそうに見えるから、人に報つてゐるのだが、人にたよつてゐるから、ら、本當の力が無さそうに見えるから、人の力に大きな誤した。」、一個。矢張り自分の力でするより仕方がナイ。

「は、「のほせ信心」で、如來して一般の見って、我しい目をでいくら純真に、如來樣にすがつてゐたようでも、自分のコノ「足元」が見えぬまんで、いくら純真に、如來樣にすがつてゐたようでも、自分のコノ「足元」が見えぬまんで、いくら純真に、如來樣にすがつてゐたようでも、自分のコノ「足元」が見えぬまんで、いくら純真に、如來樣にすがつてゐたようでも、自分のコノ「足元」が見えぬまんで、いくら然心に先輩を慕ひ、善知徳に歸依し、上人に数へを受けてゐても、コノ「足元」が見えるです。 に動いてゐる人を見ることでなくて、「法」を見ることであります。人の內に動いてゐるとれを「法」を見ることであります。自分の中に開題せられたる「法」を見ることであります。自分の中に開題せられたる「法」を見ることであります。自分の中に開題せられたる「法」を見ることであります。自分の中に開題せられたる「法」を見ることのように思つてゐたが、それこそ「客物信仰」で、此の自己の內より誕生し、自物権力で、自己を向上さして行つて下さる。本常の「敬ひの主」を信仰せねばならなかつりたを記して、自己を向上さして行つて下さる。本常の「敬ひの主」を信仰せねばならなかつりたを記して、自己として行って下さる。本常の「敬ひの主」を信仰せねばならなかつりたとして、自己ないない。 の他 です。如本」、其人の 向上さして行つて下さる。本鴬の「救ひの主」を信仰せねばならなかつたと、初思つてゐたが、それこそ「怪物信仰」で、此の自己の內より誕生し、自已全體をそして佛を信仰するといふことも、何か自分以外の處に、自分以外の別物を信心マコになつて、救ひを他に求めてゐたのが、如何にも大きな誤りであつた事をハ心に「法」を見ることであります。自分の中に開顯せられたる「法」を見れば、心に「法」を見ることであります。自分の中に開顯せられたる「法」を見れば、 如一の來が中 事 業の 中に

ば此死の で 水が動いていた。 いて居られないの如來様が現場 なかつたら空轉です。(対子)轉して居られやこそ等いのです。現はれてみえればこそ等いのです。



眞生 同 朋 VZ 就 7

土 屋 觀

なすものであります。 ましたことは我が眞生同盟としては全く新たなる發展の第一歩でありまして、 私の實に喜びに堪えないところであります。殊に今回全國の同志が各地の支部を代表して、唐澤に集□永年に渡る各地の眞生運動が今回全國的に一致團結して、同盟規約なるものを協定しましたことは 長日に渡る協議の結果、二十五日の總會に於て、全會一致の讃同のもとに其の規約が決定せられ 又此の會の一新紀元を

部の都合によつて支部の代表を派遣することのできなかつた地方もある事でありますから、 の事は各地の支部會に於て各々各地の盟友に委細報告になることでありませうが、 中には其の支

ねて我が眞生同盟の眞意の一端を披瀝しておきたいと思ふのであります。

生命を屠して守り來れる眞人の道でありました。 □此の事は靜に考ゆれは己に干古萬古に輝く宇宙の眞理でありまして、 會は決して單なる土屋一人の會ではないのであります。 つて、所謂私共同盟全體の中心生命であります。 すが、 □不肖私は本會の組織上、 動であります。 □抑も私共がこゝに眞生同盟と云ふのは宇宙の大ミオヤなる如來を中心とする眞生々活の同志が一致 閉結して、內外多事の國難に當り、 今や本會の同盟は私もその同盟の一員として、 内は各自の向上より外は社會の改善進步に全力をいたすの結團であります。 又從來の關係もあつて、 ぞの主義と信仰との充質と擴張とを以つて、其の生命とするの運 暫くその盟主として同志に押されたものでありま 献身の努力を致すべきものでありまして、此の 従って本同盟は今や至國各員諸君のものであ 古來幾多の宗教的偉人がその

道こてはないものであります。 □實に斯の道は一切の諸佛も亦之によつて佛たるを得たるの道、 而も今まではその道がたゞ二三の偉人によつてのみ主張せられ、 あらゆる人類の正に將來に於ても等しく守るべき天地の大道 一切の佛陀も此の外に眞に說く可き

であります。

私共一同盟の私有物ではなくして、

從つて今私共がこ ゝに主張する眞生の大義は決し

すべてに於て、之が實踐に其の實現を期するとするのが私共の同盟であります。 □それを私共は今後に於て、 せられたものでした。 一切人類の生活即ち、 一切家庭の生活にも、或は社會生活、 國家生活の

口此の意味に於て今日の世界の現狀を見れば凡そ今日ほご人生の眞意義を必要とする時代はない。從 現代は正にそれだけ吾々の主義と主張とを現實に活かすべきの秋であります。

 \equiv

							1
れて居ります。	ます。殊に滿蒙事變の勃發以來、上海事變を通じて、今日の我が國は實に國家存亡の一大危期に置か□之は實に世界的一大危險期と申すべく、其の中に我が國も引き込まれて行きつゝあるかの感じがし、『『	へ欠きすさむ感じに充たされて居ります。□時代はかくして、急激なる思想の轉廻となり、今や改良や改善位では間に合はず世界は革命の嵐さの秋となりました。	ロファツショがあり、社會の規約を無視する暴力團の一行さへ 地は妶に一大轉廻を來たさうと致して居ります。 而も加るとし	壊から資本主義社會制度となり更に資本主義制度の行詰りから資本主義思想と社會主義思想との衝突て、今日の日本は所謂世界思潮の真たゞ中に押し流されやうさしてゐるのであります。 圭遅焦度の肩	□其の結果は所謂今日の思想國難に及び特に重大なる思想轉換の一時期が豫想せらるるのでありましい。之が社會國家の不安を來し、所謂國家存亡の叫はるゝ所以であります。	□或は資本に勞働に、或は家主に借家人、或は地主に小作人、一として今日行詰まらぬものとてはな念にかられてをります。	云つて都市の生活はいかん。之また中小商工者の現狀は全く行き詰り展開の道さへもごうかと不安の

□足一度農村に入れは農村の疲弊の現狀は全く言語に絕し、

前途正に黯膽たるものがあります。

か と

四

せん。 □静に思へば人類の歴史あつて以來、凡そ今日ほごあらゆる方面に於て、國家存亡の危期さてはありま 人さ人この間に於て、國と國との間に於て、眞に今日程提携一致して行かねばならぬ時はないの

□此の意味に於て、 迷夢から醒めない限り 我が眞生の同盟は人類の平和と各人の自覺とを目指して、 人類の平和 は永劫に來な 鬪爭の時代とてはありません。 いのでありませう。 今にして世界の人類が此の

□友よ、 ります。 心に歸る 一切は如來の慈悲より出でゝ慈悲に歸る如來中心の生活であります。 べきであります。 宇宙の心とは天地一體の心であつて、如來の大悲を中心とするの生活であ 如來を中心に、宇宙の

さして、 □乍然か 神の生活を此の上に來すべきの團結であります。 私達の同盟は此の意味に於て、 一切が天地の生活であり、 偉人の生活である。 自ら神の生活

ません。 の團結が最も大切であります。 そこに所謂同盟の必要があるのであります。 >る眞人の生活は一朝一夕に 内には各自の自覺を促し、 各自の自覺を促し、外には一致して外憂の敵に當ら ねば な りして完成出來るものではない。そこには之等を理想さする道友

口いかなる罪ふかき人々もいかなる愚かな人々も、 總てに對して一切を友とするの心があり、 は全國の同志よ、 億兆心を一にして、此の運動の使命に立ちませう。⑥兆心を一にして、此の運動の使命に立ちませう。⑥痰がなくてはないがあり、如來を中心としてその理想に生きるの實踐がなくてはない。 如來の大悲には平等である。 此の運動の使命に立ちませう。 從つて私共はそれら

(一九三二、八、五、)

百 重

人類のために生れし眞生道

大いなるかな愛のみ力

師の君の子らがためにと說き玉ふ みことば聞きて涙こほる」

> ş n Ź

年毎にみ旨の中にとけ行けど

荒れ狂ふ焰も波もおしよせよ 己が歩みのおほつかなさよ

み親の劍に身をや守らむ



眞生會座 談 0 (=)

題、「おけさをかけた心持」

古 屋 支 部

昭和七年五月二十日 午後七時半より

南鍛冶屋町 渡部善兵衞氏宅

司會者 二氏

寺。古賀。百々。並河。中川。尾上。酉脇。澤田。渡邊。その他の諸氏併せて三十名許り。 土屋觀道。渡部善兵衞。同一家。高羽。三輪。新原。川崎。伊藤。同婦人。棚橋。同若婦人。本多氏御夫婦。崇鑄

司 會者 「太變渡邊さんから良い説を承つて、質際化と 光寺へ連れて行かうかと思ひました。さうして参た人 な氣分になつて、……それから講中を六百人ばかり善 ないから味は知りませんが、一條親讓りをかけるやう あります。この間も斯う云ふ 體驗を持つ て居り ます 云ふ問題に對する感じが十分あるやうに私は思ふので やうにし、六百條下して頂きたいと思つて、 には速製ではあるが、金襴のお袈裟か皆一條宛貰へる 私はまだお袈裟と云ふものを本當にかけたことは

も男も、 欄で、 貰つて、歸つて直ぐかけさせて貰つた。さうすると女 裟の結果がどうであつたかと云ふと、皆の氣分が非常 て貰ひました。夫で、 進に話しましたら、夫は良いことだと云ふので、 るやうないい氣になれた。さう云ふやうな事で、 なんだか、こう大きな氣分になり、偉くなつたや 心持になりました。お袈裟をかけたと云ふこと 金の房が付いてゐる、喜んでしまつて、天に上 生れて始めてお袈裟をかけた、しかも夫が金 大勸進から、 お袈裟とお血脈を お袈 下

あると思ひますから、 お袈裟をかけなかつた時代の心持とどんなに違ふもの であります。お袈裟をかけた人の心持と云ふものは、 さう云ふ點に就いては崇德寺様に何か、お感じが 一般の参詣者に對しまして、いく氣分を與へたの 一ツどうぞ…………

専問家に聽いて濟みませんが。是非どうか、

つて來るやうに思ひますが、皆の人がかけたらどうか と思ひますが。 ふことは、 どんなものでせうな 心身共にあらたかになつて、餘程氣分が變 ーお袈裟をかけたと云

百々治之助氏 んの所へ行きました。 てお袈裟をかけると、云はればしないかと思つて、 眞宗が先入主になつてをりましたで、 をかけてい にかけたい氣になりました。併しお袈裟のやうなもの がかけたくてならなかつた熱が高熱になって、 て甚だ恐縮ですが、私が大正十一年の時、實はお袈裟 かけずに居ました。その後私が小牧の河原佑晃さ いものか、……質は私は豫て眞宗系統で、 さう云ふ氣分もありますよ 時に 僧侶にあらずし 横から出

> せんがし もおカミソリも頂いておらないからかける譯に參りま 「私はあゝ云ふお袈裟がかけたい、併し私は俗人で何

「いいではないか」

いかし 「そんなことは別に……おかけになつてもいいではな 「いいですか、作法等があるやうですが……」

「來るもんですかおかけなさい」 「かけても宗門から叱言でも來はしませんか」

い氣分を感じますねー す。實にどうもいい氣分になりました。曾つて覺へな 氣持、その時分の氣持をモー一度味はひたいと思ひま と、云ふことで、 早速お袈裟をかけました。その時

司會者 「善光寺へ行きました時、汽車の中で皆がかけ れるには困りました。 ない話ですが、お袈裟をかけたなりで、 てゐる姿を見まして、嬉しく感じました。併し、 便所へ跳込ま

改まつて來て生活態度迄が良くなつたやうな感じもあ 前より、かけた今の皆さんの心持を拜見すると、迚も 困つたなーと思つたこともあります。併し、かけない かけるにはかけて貰つたが、其處迄は考へなかつた。

司會者 「そんならば吾々の生活に織込んで行く爲め 崇德寺樣 始めに、幹部一同はかけなければいけないと云ふこと 頂いた、經驗はあります。向上婦人會が出來まして、 すねー。さう云ふことは形式かは知りませんが、改ま 生活をしなければならぬと、思つて、 つて大變結構だと思ひます。 りました。鬼も角そんな氣持も出ましたが、矢ツ張り かつたが、けれ共お袈裟をかければ僧侶の方と同一の になつて、 かけた氣持は變りますねー。 お袈裟をかけたらと云ふ思ひをすることが起きま 私も氣持が改まつたやうな氣持ちがします。」 十人だつたと思ひますが、一氣には頂かな 「私にも矢張さう云ふ感じが確かにあり 私もお袈裟をかけさして 何だか知らないがお袈裟 先きが心配にな

> を拵へ、珠敷をかけて寫真を撮りました。その寫真を 落付が見えるやうに思はれます。」 だに感じます。大變その時の寫眞が能く撮れて、 見る時は、こゝに進まなければならぬと云ふ氣持を未 念にもなるからと云ふので、 がかけて見たいと云ふ氣は起ります。宗教に入つた記 く之を伸ばさうと思ひます。只之だけのものですが 金襴のお袈裟の小さい 0

百々治之助氏 僧侶になつたやうな氣分がして……、 か、多分さう私は思ひますが。」 「私も渇望しておりましたが何だか、 皆様はどうです

百々治之助氏 司會者 「清き御姿を拜見致したいです。」 裟をかけてもよからうと云ふことは、 きました。何んだかさう云ふ風にならぬと……。」 「成程度々お袈裟も何ですねー。 お上人からも聞 お袈

mo



Ш

峰

何か大き力に否はさいへられ

買の道を生きんとすなり

御佛にざんけつきせぬ此吾に いやましに生きむ力をおほえつ 念佛の後を仕事にかくる

垂れ給ひける大きみ力

上諏訪 稻 V 2

煩悩の雲には覆はれし此身をば

眞如の月は照し給ひぬ

F 西 藤 か

限りなきめぐみの数に力得て 我も此世のつとめ果さむ

唐澤山別時三昧會威想

る事が出來る。私は今囘の御別時に依つて初めて、 である。それは感謝してもしきれぬ程、絕大なものであ **きでないと思ふ總べては如來の與へ給ふ慈悲である恩寵** 恩を考へる時、 の廣大無遍のお慈悲と限りなき恩寵とを知つた、 びであつた。そこに絶大なる如來の恩寵と慈悲とを感じ 時に参加さして戴いたと云ふことは、實に限りなき喜 幾千萬の人々の中より私如き者が、 そう感じた時、 **登錢の金壹分の時も私の勝手に消費すべ** 私の總身の血潮はわき立つた。 今囘の唐澤山の御 如来の 如來

せしや思ふても恥かしき極みである。正に慚死す に生を受くる正に二十四年何をなしきたり何をなさんと 我々はかくの如き慈悲の中に育くまれ生かされて居り 只徒に弊生夢死してよいであらうか、 我この世

> こんな事でどうすると云ふ心が、 別時に参加さしていただいたのである。それを考へる時 ぞひるがへりて自己の行動と行爲を見る時、ねむれる時 **眞生こそ我等の進むべき、唯一の道である。然るに何事** る中より、 の爲めの唐澤行であったか、 の我と少しも變らぬではないか何たる事であらうぞ、 ある人生を真實の歩みとして菩薩道を進まねばならぬ。 々ねむれる者への覺醒運動によつて救われた。正に價値 ある併し我は今や土屋先生の身命を捨てくの實に尊き我 私如きものが如來の恩籠に依つてこそあの 多數の有爲なる人々のあ ひし

るのである。 然しそう思ふ心の下からも怠惰の心が頭をもたけてく 然しそうだ如來の恩寵は慈悲はそう云ふ者

てねばならぬ。そして只一心に南無阿彌陀佛・ 陀佛とおすがりをするのである。そうする事によつて私 れが救ふて下さるのである。自分の全てのはからひは捨でも、一心に南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛とおすがりす 光明を認めて身も心もはればれとするのを覺えた然し眼 如き者でもだんと〜と真實への歩みを進むることが出來 て居りながらも、その日のパンに追はれて居る多數の人 の矛盾がみちみちてをる事を感せられる、電面目に働い るのみである、 るのである。只只ひたすらどうぞと如火様へ、おすがりす それは何故であらうか佛教ではそれを業の法則に依つて 下に解決してしまふのであらうか、それはあまりにも冷 かである。 受けるべきことを受けて居るのであると、 この現實社會を見る時、そこには實にあまた そう考へられた時、私は前途に洋々たる 南無阿彌 一言の

で居ると信ずる。の如きは殆んど半數以上の人々は、この苦しみにあへいにとつては、それは死も同様で苦しい事であらう、現在或はそれは、如來の恩寵であると云つても自覺なき者

のであらうか、土屋先生の身命を捨てゝの呼び眞生主義うか、それならば何故にそれが早く正しき狀態にならぬそれとも又現在社會組織の缺陷に依ると見るのであら

びを聞いても何等目覺めぬ者それも緣なき衆生と云ふの 釋尊は「緣なき衆生は度し難し」と云はれた、 生も言ふてをられた、「我笛吹けども汝等をどらず」と又 に何故に全ての人類は耳をかたむけぬのであらうか、先 んな薄弱な者であらうか、 であらうか、そう云ふなれば殆んど全人類の九割九分迄 らだ永遠の生命を生かす事こそ真の救である只目先のと か、それとも、それは只眼前の五十年百年を見てゐるか は緣なき衆生と云はなければなるまい。佛の救ひとは、そ 現在の青年は意く地なしだ、もう少し眞面目に人生を考 こほした、今後の私がどうなるか。只只一切とは如來の よ二十才にしで大念佛者たれ」と私は如來の恩寵と慈悲 れ」私の大好きな語です私はこれをこう言ひたい の呼びが何故に早く人類にむかへられぬのであらうか、 るのであらうか、然し私は待ちどうしい、これほどの眞實 のみを見て輕々しく判斷を下すのは早計であると云はれ おはからひである一心に念佛することに依つて私の行く 會のだらしなさとを見せつけれて、 とを知つて實に歡喜した。然し、自己のあさましさと社 へるべきであらうと思ふ「青年よ、二十才にして哲人た べき道ははつきりと示されるであらう事を信ずるもので 果してそれでよいのであらう (八月一日夜一時記) 暗然とし悲噴の涙を 一青年

入信 所 感 山本 **

Ø,

B

御座いました。 神座いました。 神座いました。 神座いました。 神座にみ数を受ける事が出來た私は質に幸福者で が。皆様のお前でお話などさせて頂いた事を御座いました が。皆様のお前でお話などさせて頂いた事を御座いました が。皆様のお前でお話などさせて頂いた事を御座いました が。皆様のお前でお話などさせて頂いた事を御座いました が。皆様のお前でお話などさせて頂いた事を御座いました が。皆様のお前でお話などさせて頂いた事を御座いました が。皆様のお前でお話などさせて頂いた事を御座いました。 後離した家庭に育つた がまして誠に嬉しく存じました。 複雑した家庭に育つた

産を無くしても此の身を切りぎざまれても、 ます。今後どんな運命に落ちる事が有つても、 來なくとも, 進みます。 はてしが御座いません。此の限りなき航路に舵を取つて 偉大なるお力で御座います。しかし振り返つて自分の足 大地につ立つた時の雄々しさ何物をも恐れぬ勇さ、實に なお慈悲に包まれて、 引かれ、み惠に生されて居るのだと思ひます。この大き これを思ふにつけ、 たとひ弱い私、 心足はしつかりとふみしめて行き度と存じ 餘りにも小さな存在で御座います。前途は 如來樣のみ心を我が理想として、 私達が目に見えない大きなお力に 肉體の足は充分な歩行も、 私の心から たとえ財

が出來ませんでしこ。まに、、感激の淚を止め、大垣から一人で御座いましたが、感激の淚を止め如來樣を截り離す事は出來ません。

存じます。これも親としての懐しい情の溢れかと嬉しく下います。これも親としての懐しい情の溢れかと嬉しな人生をあやまる様な事など有つてはと、又が氣付かふて人生をあやまる様な事など有つてはと、又が氣傍の涙を止める事が出來ませんでした。歸宅後能り一心になつで、却つて

もはやちにした。 地のの節に篤に温いお言葉を頂き、實に嬉しく存じませい よいが、お山の下でお目にかられるものと存じ、御禮も申上けず失禮致しまし た事、幾重に も御許し下さ いませい おいかい おいかい おいかい おいかい はいか に温いお言葉を頂き、實に嬉しく存じま

す。後略(一御見捨なく御導き下さいます様伏で御願ひ申上けまし、御見捨なく御導き下さいましていっ までもをあやまつた時何かと御注意下さいましていっ までもても、逃け去る樣な事は無であらうと思ひますから、道 もはやお上人様からどんなお��を受ける樣な事が有つもはやお上人様からどんなお��を受ける樣な事が有つ

三越の資場に似たる水泳着井戸端の賑ひ返る目覺め哉婦へる日を文くる度に數へけり煙火をばあけて弟を思ひ出し煙火をばあけて弟を思ひ出し

土屋美智子

衆生より 古今の十方 加 彌 陀樣 (((() () () () () 大 阪

圓

彌陀たのむこゝろひとつのたふとさになみだもよほすゝ みぞのそで、

ほかはなし 十ぢまでつもりしとしのしるしには南無阿彌陀佛とい

のめみな人、 彌陀の名をきょうることのあるならば南無阿彌陀佛とた

とのはもなし、 つみの身をたすけたまへる彌陀なればありよりほかのこ

ろをこせよ, なきあとに我をわす れぬ人もあらばなほ彌陀たのむこゝ

たのめとのをしへの くりにひかれつ **小彌陀たのむ身とな**

れるうれしさ、

けあらじない つみふかき人をたすくるのりなれば彌陀にまされるほと

法をきくみちにこくろのさだまれば南無阿彌陀佛ととな へこそすれ、

たのめたと彌陀のちかひのふかければいつゝのつみはほ とけとぞなる

> たいのつ つるいきいるをもまたぬこの世なればいそぎて彌陀を めみな人、

のちの世にわが名をおもひいだしなばふかくたのめよ彌 陀のちかひを、

どなるらん、 彌陀たのむわが身ばかりはほとけにて人のこころはいか

極樂にわれゆくなりときくならばいそぎて彌陀をたのめ みなひと、

彌陀をたゞこゝろひとつにたのみなば淨土の徃生うたが

こたへよ、 後の世にわれをたつぬる人もあらば彌陀の浮土にあると ひはなし、

六十ぢあまりおく ふぞうれしき、 りし年のつもりにや願陀のみのりにあ

われなくとたれもこゝろをひとむきにいそぎて彌陀をた のめみな人、

のめみな人、 われなくばたれもこゝろをひとつにて南無阿彌陀佛をた …以下次號:

1

南無阿彌陀佛 □藤枝町 龜田彌生 合掌

つての、 康が氣づかわれてなりません。 南船北馬、 法體を御大切にして頂き度ふ御祈り はして参りました西に東に、それこそい て庭の隈々に至る迄、夏らしき氣分な漂 一雨毎に活きり 私達であるさ思へば、又一入御 御忙しい極みの御上人の御健 **ヽさした翠の濃さは映へ** 御上人め

送下さいまして有難く御厚心申し上げま忙しい中からも御心にかけさせられ御惠 先日は五月號の「真生」ご「光明」 を御

ざりしものさて、

早速注文、先日確かに

衡の第三號は永い間探し求めて、

得られ

て居ります。

Ĺ

成への歩みは遅々こして捗ごりません。 直ちに動物的な反面に引戻されて人格完 御教へな頂いても鞭撻されましても、 い申譯ない私であり 諸先輩方に對しましても ます事に慚愧

> ありません。之で御無禮致します、 御上人に長々しい手紙は認める勇氣も 皇紀二五九二年六月二日 念は深まります。 今後の御導きを祈願しつ へも有難ふ存じました。 御忙し 合掌 返す

□柏崎町 小熊啓太郎樣

御紹介を戴きました。天牛書店の佛教美 取まきれ途々御無沙汰に致して居り誠に 先般大坂よりの御親切な御書面に接し、 重に必御記申上ます。 中譯御座ゐませんでした。 早速御返書を差上可き筈の處毎日雑事に 添し拜讀厚く御禮申上ます。 御繁忙中を度々御丁寧な御貴書を賜り 失禮の點は幾

親にも御心に止めをかれ御報らせに預り これで、 に堪えません。 ました。御芳志さ、 落手致し大いに喜んで居ります。 いつかの小生の御賴みを御忘れなく。 創刊より第三號迄揃ひました。 御記憶深きには感謝 御

> 脈上ます。 れます 様耐上ますさ共に御健勝を遙かに 時節柄先生の御身體御目愛専一に遊ばさ 聲願ひます。 末乍ら御奥様始め、 思つて居ります 御紹介に預りました。天牛書店は、至つ て親切で、續いて、種なものを賴まうさ ザツト御報せして御安神な願ひます。 先は延引乍ら、 御禮申述まず旁々近況 皆々様へ宜しく御傳

鹽に供し度いこ存じます。 支部通信、並に感想、折を見て、 御尊

□津島支部通信

五月卅一日

参勝ちであつた過去一ヶ月も、七月の祭 會を開きたいと思つて居ります。 竇出し等、 醴月が終るミ共に、同志の自宅で巡回例 二大銀行の破綻、 相次く繁忙の爲め集會にも不 農繁、養蠶、商家は

富山などで自由販賣を進んで計劃し、 年通り名古屋では寺澤商店が七月號を三 行つてゐて下さることになりました。例 赞行誌「一味」は、三河、高須、和歌山、 又

百五十部暑中見舞用に利用して下さい

□岐阜 行基寺様より

御上人が始めさして同友一同精進御修養 南無阿彌陀佛 の印を跡し段如來慈光を今より仰き申候 知是非参加せよご申來侯江洲の天地に御 有之旨既に御上人の御承認を得たる旨通 中心さして講習會開催御上人の大獅子吼 の事さ遙に合掌仕候本日東光寺より來書 同友諸氏に宜ろしく御上人より御傳へ申 の豫定由東光寺へは殘念ながら鉄醴仕候 四十日間傳道の事に決定十九日出立渡鮮 廿日廿一日京城始め十月廿八日釜山終り 日割決定なし昨日開敦區長より通牒九月 しく願上候棄て一寸申上置き候朝鮮巡教 **東光寺より始まりしさは雛有極に何卒宜** 上人をさ念願致し居りしに因縁の熟して 日巡教決死的奮闘彼の天地に幾分 **\九月廿二、** 廿三日兩日青年處女

今囘は唐澤山に於て種々御指導を賜り又 □柏崎町 渡邊八右衛門様より 先は事情申述候

り候 强く如來の慈光裡に御成功あらん事を祈 び申上候何卒本部の組織等に付平和に る事のみ多かりし事を弦に合掌して御詫 する所有之候眞生道を思ふが故に失禮な 各地道友諸氏の熱に直面し深く我心に期 カ

す。 の意を表さなければなら 手によつて然もそれが何時も傳道の旅か つて見るこ今迄十數年の間先生お一人の でするこさになりました。愈々編輯に當 今月から真生の編輯を本部の出版部の方 つてなされたここを思ふこき今更に感謝 らお歸へりになつたお疲れの數日間によ ない 乏思いま

X Х

批評を賜りまして寳石の様な雜誌に致し ありますからごんしく皆様の御希望を御 今後は晋々の雑誌さして躍進する考へで いっき思い ます。

X

いません。何しろ初めての編輯の爲さい 今月の發行が少しなくれまして申譯御座 やりたいで望みが多過ぎた篇であり いざ編輯さなるこあれもやりたいこもれ

それに印刷の費用なあまりかけないで表 Х ×

せん。 想、隨筆、和歌、等々何んでもかまひま偽皆様の御投稿を お願ひ致し ます、 感 印刷器を購入して吾々の手によつて印刷 紙だの口繪だのを入れる爲、オフセツト した爲であります。

員

和七年度

唐澤山眞生修養會結集芳名

導師 上屋観道先生

[名古屋市]

中區老松町一ノ四〇 井 仁三郎

學母町中 碧海郡竹村 同郡同町 同町神明 同町北町 同町 學母町 **岐阜市佐久南町** 知多郡半田町 同郡八開村大字鹽田 同海部郡津島町 愛知縣津島町的場 西區菊井町崇德寺 南區豆田町 中區南鍛冶屋町 中區西川端町 中區自金町ニノ三 南區四古渡町 東區東大曾根町東通二丁 中區堀江町四ノニニ 町 ДŲ -L: 古 內爾 高 横河河 本本中 坤 淺 近 中 渡 渡 尾 川 部 上 本 羽 五 英 ぎ 藤 錠 子 操 夫 ん 丞 市 賀清一郎 多野木野野 多 應 千代子 正兵衞 代志子 俊 齊 善 一 二 英 義 皶 枝 眼 同町 同町 柏崎町廣小路 尼ヶ崎市大物町圓平寺 堺市櫛屋町 府下豐中町櫻塚 【大阪府市】 道頓堀キミガヨ寫眞館 東京府下上落合九〇三 深川區永代二丁目土ノー (東京 芝區芝公園第古號地ノ九 下谷區龍泉寺町二五四 淺草區北元町六 本所區石原町三丁目大ノー 揖斐郡揖斐叮 大垣市藤江町 大垣市外側町 大垣市鳥見町 海津郡西江村帆引 同市伊奈波一 市 市原後原 松南 桑都北小 渡邊八右衛門 曾我尾 昌 尾神 山藤 淺 原築村 上 國太郎 野 寅次郎 野 本 田 岡 山 せい子 裥 吉 よし子じ きの江 延子 瑞 け勇 男 寺 [長理線] 柳原町一丁目八三斯道塾內 [福岡縣] 三浦郡久里濱村八幡 大石 三重 燒津町 同町 上諏訪町桑原町 吳市海岸通四丁目 【廣島縣】 【神奈川縣】 金谷町松島 (静岡縣) 和泉町廠森哲郎內 熈 八五六角間町 高島町 湯小路 上町 南澤道志社 桑原町 同 小河膨上稻田田飯山山 田 廾 長 前山 谷 阿 森 條村 中中田 田田 中 田本 П 湉 はつ子歌 現一郎 さめ子 次久實行せたみ百 憲三 年泰 子 子雄いけや ÿ

__ Ti.

山の集ひ

一上 唐澤山 真生修養會記 —— を敷既に登嶺し、第一日は未明より非常 を敷既に登嶺し、第一日は未明より非常 な緊張裡に慶麟な お念佛が申さ れ ま し な緊張裡に慶麟な お念佛が申さ れ ま し

南、片岡の説と改造では主旨は徹底する席、片岡の説と改造では主旨は徹底する、時間をも利用して専心討議に努力した。時間をも利用して専心討議に努力した。時間をも利用して専心討議に努力した。就中、があるので、それを骨子さした。就中、があるので、それを骨子さした。就中、があるので、それを骨子さした。就中、ガラ目的の條に於て「……社會ノ浄化があるので、それを骨子さした。別に、宣しく「改造」とすべします。

が、言葉の響きが世尚に、誤解せられるが、言葉の響きが世尚に、誤解せられるうさ云ふ土屋修、渡邊、淺野なごの説と相抗して、十二分に討議した。 その結果、結局「改善」の文字を用ふる事に決果、結局「改善」の文字を用ふる事に決果、結局「改善」の文字を用ふる事に決して、

総會は片岡議長、谷口記錄係さして議事に入り、第八條役員の項に最も修補がを三年に訂正せられ、其他は委員案が承地られた。之は寅に我が同盟に於ける劉期的發展事であるこ云はねばならね。劉期的發展事であるこ云はねばならぬ。劉期的發展事であるこ云はねばならぬ。劉期的發展事であるこ云はねばならぬ。劉期的發展事であるこ云はねばならぬ。劉期的發展事であるこ云はねばならぬ。劉期的發展事である。云は寅に我が同盟に於ける劉期の發展事である。云は寅に最も修補が東山を先生に具申し、懇請し、嘉よく承期場一致を以て赞成し、直ちに議長より、野頭中野よりの動議さして、土屋先展策が計画といる。

一、總理に對する敬稱其後直ちに議事に入つた。

二、著述に就て

三、總理の傳道方法に就て 五、眞生誌に就て 元、眞生誌に就て 六、大會行事內容の研究 七、支部間の協力を聯絡 七、支部間の協力を聯絡 七、支部間の協力を聯絡 十、幹事講習會を催す方法

主、同盟旗作製の件 大體此の十二項目が論議せられて夫れ夫 群い申合せにまで到達して會を販ぢた。 就中、大會行事の整理刷新が研究せら れて第四日より直ちに實行せられた。即 ち一人一役を分擔して、其持場に盡すこ いふ事が、大會の能率を上げるこ共に個 いふ事が、大會の能率を上げるこ共に個 の生活修練になるこいふここである。 参考までに今回の部分けを暴るこ 参考までに今回の部分けを暴るこ か割部 原、

道場部 崇徳寺、松井、樂師寺 市告部 淺野、片岡、曾我尾 市告部 淺野、曾我尾

婦人部 唱歌部 體操部 掃除部 記錄部 = = 1. 班別部 時報部 大木魚 ス 發行部 神谷、中野 本多(豊) 前田、後藤、小野 古賀 伊藤、 谷口、丹羽 伊腐、本多、高木、田中 土屋(修)、小尾 淺野、 神谷

會計部 渡邊、淺野、

し、感想を附加へて頂いた事です。其他りの代表者によって地方の情況を報告す。、各休憩の間時を利用して、各地よは、婦人のみの感想會を前後三囘開いたは、婦人のみの感想會を前後三囘開いたのそれに今度の試みで一番特徴のあつたの

〇大三味佛畫像並本部費募集等。』 最後に申合せ重要事項さして ○主事の選任、本部の事務開始 部へ報告すること 〇各地支部より幹事を至急選出して、 れる豫定である。 君の速記によりパンフレツトに上梓せらそして今回の熱烈なる先生の講話は丹羽 さを見る事が出來た。 じて從來に見ぬ團結の精神さ求道の熱烈 事が出來た。そして協議會、楽話會を通 愉快な運動を棄れて、協力し、修養する を清掃し、ソコで御講話**拜聽するなご**、 從ひ、或は参道を、 毎日掃除の指揮はプロ部掃除部の豫定に 或は辨榮上人の墓地 本

。代拂込並寄贈者御芳名

△新潟 △埼玉 訪 〇電側宛 岐阜 飯田セイ様、山田タケ様、 村田源職機 石田信寬榛 東京 志村俊靜樣 小野勇樣、水野重造樣 〇參圓 桑名 光德寺様 〇五圓宛 △神奈川 光照寺様 〇六拾錢 安藤百重樣 神奈川 △柏崎 △東京 〇拾退 神戸 渡邊一男樣 種岡イト様 佐藤助吹樣、 關浦恒子樣 東京 小要利吉樣 ○貮圓宛 **噡川次郎**榛 〇拾五 上諏

> 意注の文注 價定誌本 半 ●送金は振替によるのが便利 国誌代は総て前金御拂込の事 ●講讀希望者は代金を添へて ー 华 ー ケ 年 部 です。 御申込下さい。 金六十 金 金 _ + 虜 錢 錢 郵稅共 同

東京市芝區芝公園十四號地九番昭和七年八月十二日發 一行二昭和七年八月十二日發

編輯人 土屋 観道

東京市外澁谷町中通二ノ四二

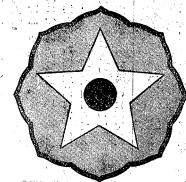
東京市外澁谷町中通二ノ四二

印刷所 伊丘舍印刷所

發行所 追 生 社東京市芝區芝公園十四號地九番

振替口座東京四七二八八番

SHINSE



駄目です。 。(対) 4

は勢切りがり なくない。 なる、すぐ弱る。それは「根」がナイからです。根のある草、いくら立派に咲いてゐても、二日か三日の壽命です、すぐ

切

花

たとへ地へ、へばり付いてゐる苦のようなものでも何遍枯れかけても、決して枯れぬ。すぐ芽をふいて來る。それは根があるからです。

「生命」が花を花咲かせ、蛙を飛ばしてゐるのです。

「中心」が花を花咲かせ、蛙を飛ばしてゐるのです。

「中心」が花を花咲かせ、蛙を飛ばしてゐるのです。

「中心」が花を花咲かせ、蛙を飛ばしてゐるのです。

「中心」が花を花咲かせ、蛙を飛ばしてゐるのです。

「中心」が花を花咲かせ、蛙を飛ばしてゐるのです。

「中心」が表るからです。

「中心」でなくて、切花であるからです。

「中心」でなくても足のない切花では駄目だ、廣告ばかりあでやかで

「明ばかり大きくても足のない切花では駄目だ、廣告ばかりあでやかで

「明ばかり大きくても足のない切花では駄目だ、廣告ばかりあでやかで

「明ばかり大きくても足のない切花では駄目だ、廣告ばかりあでやかで

「明ばかり大きくても足のない切花では駄目だ、廣告ばかりあでやかで

「明ばかり大きくても足のない切花では駄目だ、廣告ばかりあるからです。

望みと意氣に燃えた人間になりた いもので

昭和七年八月 十二 昭和七年八月 十 日野刷納木 第十一卷第七號

(第三種郵 便 物 認 可)

(毎月一回十二日發行)